被爆者の声を聞く
―ヒロシマの伝承が直面する課題について

土肥幸美

一　はじめに

原爆の恐ろしさをどのように後世に伝えていくのか。戦後七十年以上が経過し、被爆者の生の声を聞くことが少しずつできなくなりつつある今、いよいよ切実に考えなければならない時がきている。

伝えるためには、何らかの形で、例えば言葉で語ったり、絵に描いたりすることで当時の惨状を表現することが必要である。しかし、被爆当時の惨状を体験した人たちがしばしば口にする「むごすぎて言葉にできない」、「どう言えば良いのかわからない」、「結局体験したもんでないと、ほんまのことはわからんよ」などという言葉は、これから語り継ぎたいと思っている者を悩ませる。体験していない者がいくら努力して再現しようとしたところで、体験者たちからは「こんなものではなかった」と言われてしまう。[1] 第二次世界大戦下のホロコーストのおぞましさの「表象不可能性」が、ヒロシマについて論じられる際しばしば引き出される[2]が、筆者も前述の被爆者の言葉は、まさにこの「表象不可能性」を彼ら自身の言葉で言い表したものだと考える。

しかし非体験者が伝えることを諦めてしまうことは、体験者たちの本望ではないはずだ。だからこそ伝えるのが難しいことを伝えるという課題に、原爆を体験した者たちは長年取り組んできた。歴史的な惨劇を繰り返さないため、体験した本人たちだけでなく、後に生きる者たちもやはり語り継ぐべきであろう。

そんな中で、本論で取り上げる広島市の「被爆体験伝承者養成事業」（以下「伝承者事業」と呼ぶ）は、改めて私たちに被爆体験の伝達の難しさを感じさせている。

筆者は広島平和記念資料館（以下「資料館」と呼ぶ）で職員とし

て働く中で日常的に被爆者と、とりわけ証言活動をしている被爆者と接してきたが、この伝承者事業が始まった頃、この取り組みに対して被爆者の中には戸惑いを感じている人もいた。伝承者事業は、被爆体験を積極的に受け継いでいこうという取り組みであるのに、なぜその継承元である被爆者が戸惑いを感じなければならなかったのか。本論では、このことを切り口に被爆体験の伝達に関わる課題を改めて確認していきたい。

二　被爆者たちの言葉から

（一）「被爆体験伝承者養成事業」について

本題に入る前に、まずは「伝承者事業」について基本的な情報を確認しておく。[3] 広島市の「伝承者事業」とは、被爆者の高齢化に伴って、被爆体験を話す人が少なくなってきている中で、広島市が被爆体験証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える「被爆体験伝承者」を養成するというものである。[4] 意欲がありかつ概ね五年以上活動を行う自信がある者であれば誰でも応募可能とされている。

「被爆体験伝承者」の候補者たちは、三年間の研修の中で被爆の実相や話法技術等の講義を受講し、証言者から被爆体験等の伝授を受け、伝承講話内容を作成し、講話の実習を行う。そうした研修を修了した後、公益財団法人広島平和文化センターの委嘱を受けて初めて「被爆体験伝承者」として公式の活動が可能となる。

広島市は平成二十四年度からこの事業を始めて以来毎年この養成研修への参加者を募集し続けている。三年間の研修の修了者たちがすでに平成二十七年度から「被爆体験伝承者」としての活動を始めている。主には広島平和記念資料館で休館日を除いて毎日開催されている一日三回の定時講話で講話を行うほか、依頼があった場合には依頼者が希望する場所に出向いて講話を行う場合もある。

なお、この「伝承者事業」が一般に知られるようになったのは、事業が始められる前年度の二〇一二年二月、広島市長が記者会見で発表した時であった。例えば広島県内で最も広く読まれている中国新聞は、二月八日の朝刊で次のように報じた。

> 広島市は二〇一二年度、被爆者の体験を語り継ぐ「伝承者」を養成する講座を開講する。被爆者と研修生が「師弟関係」を結び、証言活動を伝承する。（中略）被爆者の高齢化が進む中、被爆者に代わり体験証言ができる人材を育てる狙い。（中略）被爆体験継承に力を入れる松井一実市長は七日の記者会見で「核兵器廃絶を訴えていくには被爆者の思いを発信し続けることが重要。自分のことのように語れる人を養成したい」と話した。[5]

こうした報道では「師弟関係」や被爆体験を「自分のことのように語れる人」を育成するということが強調して報じられた。これらの文言は、被爆者に、単に被爆者の「身代わり」を作るのではないかと感じさせ、彼ら・彼女らがこの事業に当初違和感を抱く一因となった。

（二）二〇一二年インタビュー――事業開始直後の複雑な心境

「伝承者事業」が始められた頃、筆者もまた、この取り組みが本当に意味のあるものになるか、疑問を抱いていた。被爆者と研修生はほとんどの場合、もともとは他人同士である。その他人同士が行政主導の組織的な事業の中で、個人的な信頼関係を築きながら、被爆体験を受け継ぐことはできるか。また、そもそも被爆者本人の中でも証言の内容は時と場合によって変化したり揺らいだりするもので、いつも同じではないのに、広島市の「伝承者事業」で言う「受け継ぐ」とは何をどのように「受け継ぐ」のか。

そこで筆者は、受け継がれる側である被爆者自身が「伝承者事業」をどう考えるかを知るため、二〇一二年秋、九人の被爆者にインタビューを行った。

九人は、いずれも前述の「被爆体験証言者」として登録をし、日常的に「被爆証言」を行っている。この中には、「伝承者事業」で受け継がれる側として関わっている人もいる。

調査は、「広島市が始めた「伝承者事業」をどう考えるか」という質問を投げかけ、自由に答えてもらう質的調査方式を採った[6]。本心を吐露したと思われる発言を掲載するため、以下名前は伏せてそれぞれアルファベットの仮名で記す。

インタビューを通じてわかったことでまず押さえておきたいのは、被爆者たちは、「伝承者事業」をひとまずは肯定的に捉える傾向にあったということである。

A氏「賛成じゃけど、さて困ったなあということもあるけど。もう必ず伝承していかんかったら、忘れ去られていっちゃ困るというのはあるけえ。[7]」

C氏「他に伝える方法がないと思う。はじめるのが遅い。[8]」

D氏「まあ、そりゃぜひやってほしいですよね。そうしないと続いていかないからね。そのためにも私たちが長く生きていかないといけないですね。[9]」

E氏「（多数の応募者がいたという情報を聞いて）関心を持ってもらったということでは、あの被爆のことをみんな知りたがってもらったという意味ではいいことよね。[10]」

F氏「そりゃ、われわれから見れば非常に不十分なもののようなところもあるが、何もしないよりはいいんじゃないか。[11]」

G氏「それ自体は悪くないと思う。ただ、それをどこまで若い人が受け止めてくれるかということなんですよね。」[12]

I氏「まあ、いつまでも生きてるわけじゃないから、今回それをしてくれるのはいいことだと思います。」[13]

端的なのは、F氏の「何もしないよりはいいんじゃないか」という言葉である。その他の回答も見ていただくとわかると思うが、皆どこかしら、「困難かもしれないが、忘れられたら困るので、とにかくやるしかない」というニュアンスが感じられる。

しかしながら、「伝承者事業」に不安や戸惑いを感じている人も少なからずいたということも彼ら・彼女らの次のような言葉からわかる。

A氏「継承は、やってみないとしょうがないと思うけど、私の本当の思いは、伝わるかどうかというのは、人に伝わったらね、私の思いと違ってくるんじゃないかなという気はするんですよ。」[14]

B氏「被爆者でない人が一方的にずっと話をしても、あまりハートにつながらないと思う。（中略）体験した者が話しても聞くほうはどこまで頭へ入れて聞いてくれとるかね。今日も後ろのほうはざわついとったけど、そうなると思う。私が話してもその程度だから、もっとひどくなると思う。」[15]

C氏「いくら実際の証言者の話を何度も聞いたからと言っても、証言者その人になることは絶対にできない。もし僕にそのまま『なりきろう』としたら、それは僕の偽者だ。くさい話になってしまう。だけど、僕の体験、僕のスピリッツをその人なりに伝えることは出来ると思う。僕のスピリッツというのは、僕の気持ちや思い、感性、魂のことを言うんだけどね。僕の体験を自分のこととして受け止めて、自分の言葉で僕の体験を伝えてくれればそれでいい。これをね、僕は「心」の移植「スピリッツ・ドナー」だと思っている。僕はいずれ近いうちに滅んでいなくなるけど、僕のスピリッツのドナーが、他の人の中で生き続けてくれたら、僕のスピリッツは残る。それが「伝承する」ということだと思う。」[16]

H氏「当初はあの、趣旨を文書にしたものなんかを見ると、若干問題あってね、私はもうやらないと言ったんよ。（中略）身代わりを作るようなかんじだったわけですね。そんなのは、伝えても、あの、なんというかな。心が伝わるわけはない、そういう考え方では。」[17]

A氏は、他の人がA氏に代わってA氏の証言をする中で、元々の証言の内容や意図が変質することを危惧している。B氏は、体験者

本人が証言しても伝わらないこともあるため、非体験者でない人が行う証言ではますます伝達できないのではないかと、その訴求力に疑問を持っている。

C氏とH氏は、「自分のことのように語れる人を養成したい」と広島市長が話したと報道されたことに反応して、そのことに違和感を訴えている。彼らはその報道から、「伝承者事業」は証言者の一言一句を暗記し、真似することで、証言者をそのままコピーしようとする取り組みなのではないかと受け取り、もしそうならそれは間違っていると否定している。つまり、演じられることに対して拒否反応を示している。もちろん彼らは演劇という一般的な芸術のジャンルを否定しているのではない。実際にあったことを体験者本人が思い出しながら証言するという場においては、言葉や仕草の表面的な模倣ではだめだと言っているのである。

このように見ていくと、証言の真正性をどこで保つかということが大きな課題であることが改めて見えてくる。これについて、先ほどの四人はそれぞれ「思い」や「ハート」、「スピリッツ」、「心」などが、証言の真正性に欠かせないものだと言及している。それぞれ違った単語を使っているが、筆者は、これらは同じものを指しているのではないかと考える。一言一句証言者と違わず被爆体験を伝えることを彼らは求めていない。彼らが望むのはむしろ、特にC氏が強調しているように。証言活動の動機や背景、つまり、証言活動にどんな思いを込めているかを受け継ぐことだと言えよう。

しかし、その「思い」は時にうまく引き継がれず、被爆者がもどかしさを感じる場合もあるということを次節で触れる。

(三) 二〇一四年インタビュー ―安心感と伝わらないもどかしさ

さて、最初のインタビューから二年あまりが経過した二〇一四年、筆者は二〇一二年にインタビューを行った九人のうちC氏、F氏、G氏、H氏、I氏の五人に再びインタビューを行う機会を得た。この時期は、最初に事業に応募した受講生が「伝承者」になるための仕上げ作業を行っていた頃であった。五人には、前回のインタビューと同じく自由回答式を取り、「伝承者事業が開始されて二年以上が経ちましたが、この事業について今の考えや気持ちを教えてください」という質問を投げかけた。

すると、事業開始当初は「半信半疑」のような心情で伝承者事業に取り組み出した被爆者の中に、事業を肯定的に捉えるようになっていた人がいた。次の二人の言葉は、そのことを端的に示す。

C氏「僕のところのチームに入ってきてくれた人はね、素晴らしい人が多いんじゃ。[18]」

H氏「嬉しくってね、ほんとに。全体から言えば感動している。熱

心で、熱い気持ちにあふれとる。純粋に伝承しようとしてくれていることに感謝している。（中略）伝承者が十人おれば、伝わる可能性も増える。[19]」

C氏とH氏は、「手弁当」で何度も被爆者とミーティングを重ね、悩みながら原稿を作成する伝承者の熱意に、当初とは違った感情を持ち始めた様子だった。自分の伝承者のことを、C氏は親しみを込めて「チームの人」とI氏は「仲間」と呼ぶ。このように、実際に取り組む中で、被爆体験の引き継ぎ手がいると感じ、安堵した被爆者もいた。筆者が危惧した、他人同士が信頼関係を築きながら語り継ぐことができるかということは、杞憂に終わったかのように思えた。

しかし一方で、伝承者の引き継ぎ方に違和感を抱く証言者もいた。それは次のG氏の発言からわかる。

G氏「みんながね、私のことを話そうとするの。だから、それはちょっと違うって言うの。確かに私、孤児のことを証言しとるんじゃけど、私のことよりか、孤児の、私のことより。今こうして生きている数（＝原爆孤児の数）は少ないんだから、これはね、果たしてこれからの子どもたちに当時の孤児の姿として、本当に正しく伝えられるかどうか、私疑問に思っているんですよ。ほんとに孤児になった子どもたちがね、死んでいった子どもたち。この子達のね、無念さ。被爆しなかったけど、生きられなかった子らのこと。[20]」

G氏は、原爆で両親と兄弟を失ったいわゆる「原爆孤児」だった。証言の中で語られるその人生は実に過酷で、聞く者の印象に強く残る。彼はもちろん自分が経験してきたような辛い人生を他の人に送ってほしくないと思って話をしていないわけではないのだが、証言を行う最も強い動機は、別のところにある。すなわち、自分のように生き延びることができなかった原爆孤児たちのことを伝えたいがためなのである。

G氏のように死者への後ろめたさや、死者への供養のために証言をしたり体験記を執筆したりするなどの行動を取る被爆者は少なくない。[21]筆者がインタビューをした中で、他にも死者を意識して証言をしていると発言した人がいた。

H氏「最初から言ってるんだけど、被爆者はある意味では亡くなった方の伝承者だと思う。生きたくても生きられなかった十四万人の無念の思いを伝える存在だと思っている」

「（自分が被爆した場所の前を通るとき）いつも「せっかく生き残ったのに、お前は何をやっとるか」と言われているよう

な気持ちになる。[22]」

D氏「私最近ね、(原爆で)亡くなった友達の夢をよく見るんですよ。その夢がいつも「頑張れよ、頑張れよ」って「私の分も頑張れよ」って聞こえるんですよね。[23]」

H氏の発言が端的に示しているが、彼らは、あの時に死なず、今こうして自分が生かされているのは、あの時のことを語るためではないかという使命感に突き動かされている。だからこそ、高齢によって身体の自由が徐々に効かなくなる中、それでもなお被爆者たちは語り続けるのである。また、これまで語ってこなかった被爆者も、自らの寿命を意識し始めた今だからこそ、これを言わずには死ねないと、語り始めているのである。

こうしたことから、ある被爆者の伝承者になるということは、その被爆者自身の体験だけでなく、彼／彼女とつながる死者たちの伝承者にもなるということだと考える。今生きている被爆者が一九四五年八月六日にどんな体験をしたか、その後どのような苦しみを味わったかを伝えることはもちろん重要なことであるが、被爆者が見た死者の無念さや、死者への思いまで伝えることもまた重要だ。

だがG氏の例のように、生きることができた被爆者の体験だけでも強い印象を与えるがゆえに、被爆者が語り継ぎを行なう動機となった死者への思いが伝わらないという場合も起こりうる。無論、生きることができた被爆者の体験だけでも壮絶な体験である。しかし、生き残った彼らがその体験を次の世代に伝えなければならないと思ったのは、死者の無念さを思い、死者への後ろめたさを長年感じ続けてきたからだということを考えると、生きることができた被爆者のことだけを伝えるのでは、やはり表面的な語り継ぎになるだろう。

どのくらい被爆者とつながる死者を意識しながら語り継いでいけるか。このことも、語り継ぎを表面的なものではなく、深みのあるものにしていく鍵になるのではないかと筆者は考える。

四　おわりに

「伝承者事業」は、本来的には体験した者でないとわからないことを体験していない者が伝達する難しさに、受け継がれる側である被爆者も改めて直面させた。本論で被爆者が抱いている死者への思いを例に取り上げたように、「被爆者の思いを引き継ぐ」と言った際の「思い」がどのようなものなのか、受け継ぐ側と受け継がれる側で「行き違い」が発生しうるというのもその難しさの一つである。

幸い、私たちにはまだもう少し、被爆者から直接話を聞く時間が残されている。その間にいかに彼ら・彼女らと意見を交わし、伝達

すべきことを確認しあえるか。このことが、非体験者が被爆者の、そして死者たちの真摯な代弁者になるために必要とされている。

付記

本稿は、二〇一六年三月二十日（日）、広島大学（東広島キャンパス）において行われた、広島芸術学会・第一一四回研究発表例会にて口頭発表した原稿「伝承者と朗読劇―非体験者による被爆体験の語り継ぎについて」を基にしつつ、大幅に加筆・修正したものである。

註

（1）二〇一三年三月から盛り上がりを見せた、広島平和記念資料館の改修工事で被爆再現人形を含むジオラマ展示が撤去されることに対する市民による反対運動は、体験者と非体験者の感覚の違いを露呈させた一つの例と言える。原爆の体験者は、広島県被爆者団体協議会理事長の坪井直の発言に代表されるように被爆再現人形を見て「こんなもんじゃない。こんなもんだと思われては困る」と言う人も多いが、一方で非体験者の多くは「これこそ原爆の恐ろしさを表現した重要な展示だ」と言う。一九七三年のジオラマ設置当初、当時の新聞記事（例えば「ロウ人形公開反応さまざま」『中国新聞』一九七三年八月七日（火）朝刊）を見ると、「死者を見世物にして良いのか」などと被爆した姿をリアルに再現することに反対する声が今よりもずっと強かったようだが、今はそうした声はほとんど聞かれない。

（2）近年の著書であれば、例えば柿木伸之「残傷の分有としての継承―今ここで被爆の記憶を受け継ぐために―」『パット剝ギトッテシマッタ後の世界へ―ヒロシマを想起する思考』インパクト出版会、二〇一五年、二三〇―二五一頁がある。

（3）次のウェブページを参照した。
広島市ホームページ「被爆体験伝承者養成事業について」
http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1438676263282/index.html
（二〇一七年五月二十五日アクセス）

（4）補足しておくと、ここでいう「被爆体験証言者」とは、公益財団法人広島平和文化センターに所属して自らの被爆体験を証言する活動をする被爆者「被爆体験証言者」を指し、その他の団体や個人で活動する被爆者は含まない。「被爆体験証言者」が指す範囲の狭さ、つまり限られた被爆者しか継承の対象にされていないということについても問題とすべきかもしれないが、本論では主題から外れるため、追及しない。また、そもそも公の機関が引き継ぐ側と引き継がれる側の「個」の人間関係が非常に重要になると考えられるこの取り組みを、組織的に事業化すべきかどうかについても議論の余地が大いにあると考えるが、本論では触れない。

（5）「被爆体験の伝承者養成　広島市、新年度から講座」『中国新聞』二〇一二年二月八日（水）朝刊

（6）アンケート用紙内で、調査者があらかじめ用意した回答を選んでもらう手法ではなく、インタビューされる人が主題について自分の準拠枠で自由に話す手法。

（7）筆者によるインタビュー　二〇一二年十月五日（金）
（8）筆者によるインタビュー　二〇一二年九月十八日（火）
（9）筆者によるインタビュー　二〇一二年十一月四日（日）
（10）筆者によるインタビュー　二〇一二年九月二十一日（金）
（11）筆者によるインタビュー　二〇一二年九月二十六日（水）
（12）筆者によるインタビュー　二〇一二年十月四日（木）
（13）筆者によるインタビュー　二〇一二年十月十二日（金）
（14）註七と同じ。
（15）筆者によるインタビュー　二〇一二年十月二十五日（木）
（16）註八と同じ。

(17) 筆者によるインタビュー　二〇一二年十月二十三日（火）
(18) 筆者によるインタビュー　二〇一四年五月二十九日（木）
(19) 筆者によるインタビュー　二〇一四年六月二十七（金）
(20) 筆者によるインタビュー　二〇一四年六月十日（火）
(21) 米山リサも被爆体験の証言活動をしている沼田鈴子や山崎寛治らを取り上げ、彼らが死者のために、死者に代わって証言をしているということを指摘する。米山リサ著、小沢弘明、小澤幸子、小田島勝浩訳『広島 記憶のポリティクス』岩波書店、二〇〇五年、一九二頁―二〇九頁。
(22) 註十九と同じ。
(23) 註十と同じ。

（どひ・ゆきみ／広島平和記念資料館）